

期間：2018年10月16日～10月24日

訪問先：ベイルート・レバノン、ラマラ・ヨルダン川西岸（パレスチナ自治区）

今回の出張の目的は、今年4月から3年計画で開始された、日赤とパレスチナ赤新月社の共同事業である、パレスチナ難民への医療支援事業の進捗状況の確認と、今後の事業伸展に向けての、パレスチナ赤新月社との協議でした。

まずベイルートに入り、市内の難民キャンプの中にあるハイファ病院を訪問しました。ここが4月から支援に入っている病院で、現在はたまたま医師、看護師、事業管理要員全員が大阪赤十字病院から派遣しています。

支援内容ですが、救急部門の質の向上を目指して次の5つの活動を行っています。

1. 系統的なトリアージの導入
2. カルテを記載しやすいものに改訂し、全外来患者にカルテを書く（これまでは一部の患者にしかカルテを作っていなかった）
3. 系統的な外傷診療の導入
4. 種々の診療プロトコルの改訂とプロトコルの順守の徹底
5. 多数傷病者の対応



ハイファ病院正面玄関

以下、事業開始6か月の進捗です。

1. と 2. についてはすでに10月から現場に導入されています。両方共に、診療の質を上げるには不可欠なものですが、現地の医師や看護師にとっては仕事量が増えることになるので、当然ながらすんなり導入できたわけではありません。トリアージシステム導入のために日赤要員と病院スタッフの合同プロジェクトチームを作るところから始めました。このプロジェクトチームメンバーに、日赤の医師、看護師から、まずトリアージとはどういうもので、なぜ救急に導入する必要があるのかの説明を行い、チーム内で議論を重ねました。次のステップとして、プロジェクトチームの病院スタッフから他の病院スタッフにレクチャーを行いました。その後も議論を重ねて、ハイファ病



カルテとトリアージのボード

院に適したトリアージのアルゴリズムを作成し、全員に納得してもらった上でこれを印刷してボードにしました。

カルテの導入についても同様で、病院幹部（院長、診療部長、看護部、データ管理者）などと議論を重ねて現在のカルテを記載しやすいものに改訂し、最終的には、病院幹部から院内への導入がアナウンスされました。ここまでくるには、語りつくせないほどの山あり谷ありであったことが想像されます。

3. と 4. については、日赤要員が繰り返しレクチャーと実技の実習を行い、院内に定着させようと頑張っています。4 月から半年ですでに 20 回以上のレクチャーを行いました。

5. の「多数傷病者の対応」についてはまだ手つかずですが、今後同じく医療関係の支援事業をしているオランダ赤十字社と共に計画を立てていくことになりました。



病院スタッフに講義をする当院山田医師

いずれにしても、事業はまだ始まったばかりで、今後は、導入したシステムや知識、技術をいかに定着させていくかが重要となります。

ハイファ病院は、事業開始当初の計画では 6 か月の支援でしたが、進捗状況から 12 ヶ月に延長することとし、パレスチナ赤新月社のレバノン支部では、これらの進捗状況を報告し、今後の計画について協議を行いました。



パレスチナ赤新月社レバノン支部でプレゼン

ベイルートの後、イスラエルに移動しました。レバノンとイスラエルは対立関係にあるため、ベイルートから直接イスラエルに行くことができません。一度トルコのイスタンブールまで戻ってからイスラエル・テルアビブ空港に入るというルートをとります。訪問したのは、イスラエルの中のパレスチナ自治区であるヨルダン川西岸のラマラという都市です。ここはパレスチナの実質的な中心地で、国であれば首都にあたる場所です。パレスチナ赤新月



パレスチナ赤新月社本社でプレゼン

社の本社もここに 있습니다。ここでは、ベイルートでの事業の進捗を報告すると共に、今後行うガザ地区での支援についての話し合いを行いました。

ガザ地区は、現在ご存じの方も多いと思いますが、現在種々の外的要因によって、治安が極めて不安定な状態になっていると同時に。本来今年の10月からガザのパレスチナ赤新月社の病院である、アルカッツ病院の支援を開始する予定でしたが、今年頻発した国内災害への対応もあり、改めて開始時期についての協議を行っています。



ラマラ・ヨルダン川西岸の街並み

パレスチナ難民問題は、70年間解決されていない、根が深く、複雑な問題です。解決の糸口が見つからない状況下でパレスチナの人々がもっとも恐れているのは、世界から忘れ去られてしまうことです。そういう意味で、日本からの長期にわたる支援は、事業自体がパレスチナの人々を勇気づけているという意義があります。皆様のご支援よろしくお願いたします。